



墨田区北斎館 基本設計プロポザール

北斎への旅

北斎の浮世絵などに表現されている江戸時代の庶民のいきいきとした生活や雄大な風景画は時空を超えて我々を未知なる“旅”へと誘ってくれる。北斎を知ること、それはまさに北斎の記憶の中に入り込み北斎が生きた活気あふれた時代の空気を想像することに他ならない。こうした想像力を育み、地域の活力を生み、また人々の記憶の中に新たなランドマークを生み出すような強い構成と空間をもった建築を提案する。さあ北斎をめぐる長い“旅”に出発するとしよう。

平面計画

BOX状のIGがランダムに配置される各階ひとつとして同じ平面をもたない計画である。東側に搬入電動線、中央に一般動線が配置されておりIGと呼ばれるBOX状の展示空間とオープンなO.G.、さらにはボラス状（多孔質）に似た多くの吹き抜けが二つのギャラリー空間を繋いでいる。



B1F (GL-6m)1,006㎡

多目的ホール、講座室など大勢の来場者が同時に入出入りするようなプログラムやショップが配置され、吹き抜けを通して1階と繋がっている。また中央のO.G.(ホワイエ)ではワークショップ等地域に開かれた催しが恒常的に開かれる。東側には機械室が配置される。



1F (GL±0m)496㎡

中央にエントランスホール、カフェが公園と連続する北西の角、事務室、搬入のためのバックヤード諸室、駐車場(7台)が東側に配置されている。ボリュームをばらして配置することで人々を建物に引き込みやすい平面計画がなされている。

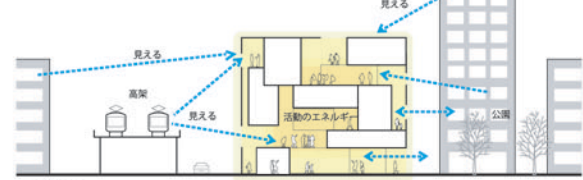
①北斎ギャラリー：サーキュレーションネットワークの創出

江戸時代から脚々と継承されるこの亀沢地区一帯の格子状の街区割において現在その時代の活気を失い、そこかしこに空き店舗や空き地がみられ閑散とした印象を与えている。そこで本計画では新北斎館を拠点としたネットワークによる街の活性化を提案する。北斎通りを軸に空き店舗などを利用し、そこを北斎ギャラリーと位置づけ街中のギャラリーとして北斎や江戸にまつわる事象を市民とともに深く理解する仕組みを展開したい。ゆったりとした散歩・観光コースとしてのサーキュレーションネットワークをつくり出す。



②多様な空間：地域活性化装置としての建築

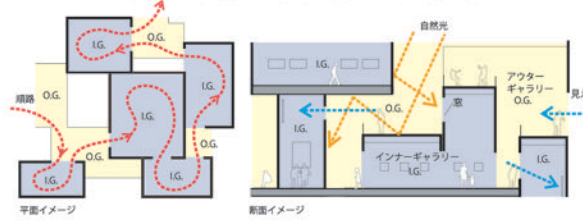
大空間ではなく、小さな単位の高密度な内部空間の表現は江戸時代における庶民の生き生きとした生活空間を想像させるだけでなく現在の閑散とした亀沢地区一帯の都市空間に対して新たなエネルギーを注入する役割を果たす。また敷地四周を囲むマンション、高架、民家、公園などさまざまな要素に対して、ファサードとしてもたど均質な表現ではなく、どの角度からみても施設内部の様々な活動が想像されるような多様なかたちの開口部と外壁面で構成されている。



③館全体がギャラリー：二つのギャラリー

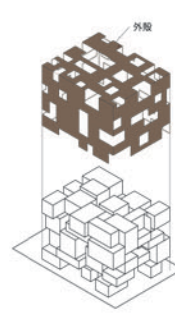
館全体はBOX状の展示空間であるインナーギャラリー (IG) とオープンなアウトターギャラリー (O.G.) から構成される。

- a.インナーギャラリー (IG) の特徴：大小様々な大きさのBOX状の展示空間及び収蔵庫など比較的文化的価値の高い作品の展示・保存空間。IGには大きな“窓”があり、OGへと連続し館全体の空間と同時に体験できる。各フロアのIGは様々なプロポジションでひとつながりで連続しており、多様な天井高さを持ちながらパーソナルな空間として来場者に親しみやすく落ち着いた展示空間を提供する。
- b.アウトターギャラリー (O.G.) の特徴：IGのBOX外壁を使った展示、休憩、ちょっとしたワークショップなどセミパブリックな用途として利用される開放的な空間である。またIGをつなぐハブファナー(縦断帯)としても機能する。吹き抜けを通してありの果のように立体的に連続しており、様々な角度から自然光が入りこむ半屋外的な内部空間である。O.G.での利用者の様子は外周からも視認され、内部でのばらばらな活動がファサードという一つの絵の中の要素として絶えず変化する風景を提供する。



構造計画

本建物の構造は、地上部をS造、地下部をRC造とする。地上部の井桁状に組まれた外壁と内部の縦横されたボックスは、ともに鉄骨プレース構造としている。内部のボックスは、各階で個々にずれながら、積み上げられて、外壁構造と一体的に組み合わせる事で長期および地震時(風圧時)にも成り立つ入れ子構造形式となっていて、高い耐震性能を確保できる。基礎は、GL-3.0m直にある支持層に確実に支持する杭を使用し、地上部をS造とする事で、建物全体の軽量化を図り、コストの合理化も実現させている。



設備計画

IG (展示室) は各部屋パッケージ空調によって個別制御することでエネルギーロスを軽減する。また吹き抜け上部に蓄積された暖気は夏には排気、冬には循環させることで省エネルギーを図る。中間期には外部に接する多くのテラスからの空気の導入により吹き抜けの煙突効果による建築全体の熱負荷を軽減する。

コスト計画

地震が強いため鉄骨造とし上部躯体の軽量化、工期の短縮などによるインシタルコストの軽減化を図る。ランニングコストについては外壁の断熱性能をあげガラス面を少なくすることで熱負荷を極力減らす。さらに外壁材として、コーラン鋼板(鉄板)などの汚れても気にしない素材を選定しメンテナンスフリーを目指す。



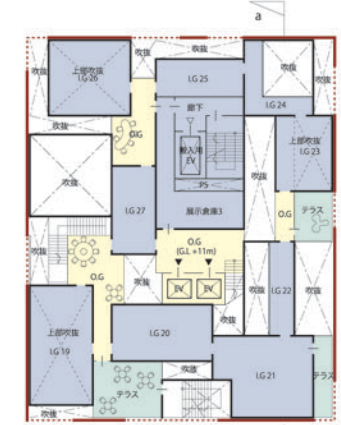
2F (GL+4m)524㎡

展示空間：北斎の旅の出发点または終着点。大小合わせて10のIGがランダムに配置されている。公園側と東側にはテラスも配される。



3F (GL+7m)442㎡

展示空間+ボランティア室。8つのIGと車庫からもよく視認できる高さの南側にテラスが配置されている。



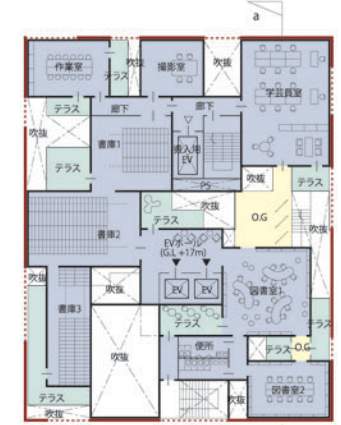
4F (GL+11m)434㎡

展示空間：9つのIGが配置される。



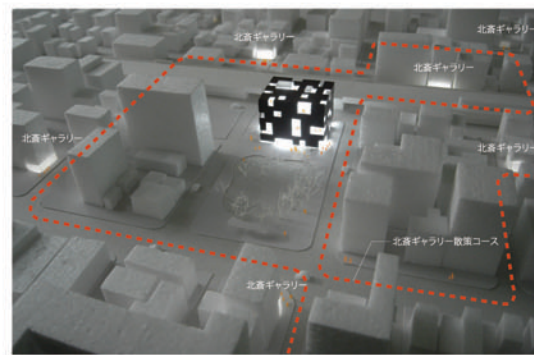
5F (GL+14m)412㎡

展示空間+収蔵庫：3つのIGの他、館長室や会議室などが配置されている。展覧の拠点(始点)。保管のための収蔵庫は外壁には接しておらず安定した環境に配置されている。



6F (GL+17m)467㎡

図書室+音庫+学芸員室：最上階のレベルでは一般の人々も利用できる図書室を中心に学芸員のための講義室が東側に配置される。テラスも多く空の見える開放的なフロアである。



北側街景(夕景)



南側近景(電車からの眺め)



内観：全てがギャラリー

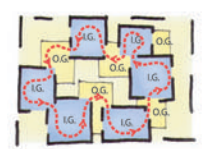
やさしい空間

その一：光のランドスケープ

O.G.には壁で反射した間接的な自然光がふりそそぎ、日が暮れるまでは館全体が柔らかい光に包まれた穏やかなランドスケープを形成する。またIGにおいても“窓”を通してその光を感じることが可能になる。



断面イメージ



平面イメージ

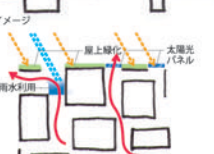
その二：動線

全てのフロアには段差がなく、平面的にひとつながりの空間として連続し行き止まりのない空間となっている。IGやO.G.の通過の仕方により作品の様々な楽しみが可能な順路が形成できる。



その三：資料・展示・音

作品が飾られるIGは吹き抜けを介して外壁から独立して配置されるものが多く音や温度など安定した内部環境を形成する。また収蔵庫や書庫をセキュリティとしても安全な最上部(5.6階)に配置し湿気等から守る。また多くの吹き抜けは、展示室を周囲の音から守る役割を果たす。



断面イメージ

その四：環境

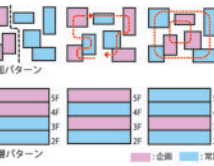
中間期(春秋)にはO.G.から外気を取り入れ吹き抜け部分の煙突効果を利用して建物の熱を夜間排気することで省エネルギーに配慮する。屋上緑化や雨水の浄化による中水利用、太陽光パネルの設置による自然エネルギーの利用を積極的に推進し子供たちへの教育プログラムの一環として展開する。



断面イメージ

その五：地域(北斎リーダーの育成)

施設のキュレーターとは別に来場者に対して北斎にまつわる紹介やワークショップ、施設の案内を主体的に行える人材、北斎リーダーを育成する。北斎リーダーは市民から選ばれた人であり、地域の代表として北斎ギャラリー一帯のネットワークづくり、生涯学習のための拠点づくりなども行う。

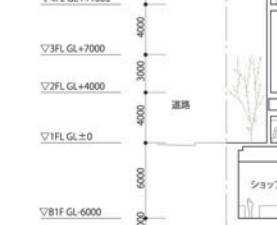


平面パターン

その六：展示計画

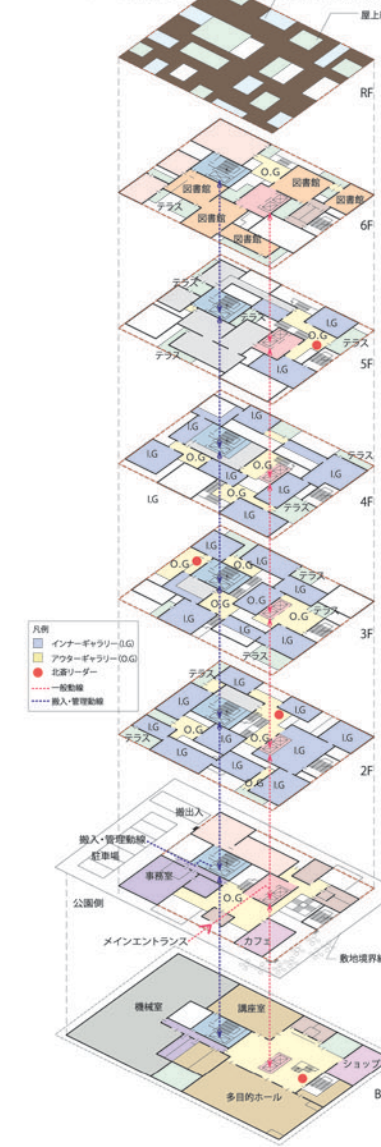
2階から5階まで大小30のIGは常設・企画展示室のどちらにも利用可能である。階ごとにテーマを変えるもよし、企画に応じて常設と企画展示の面積の調整が可能となりフレキシブルな使い方を想定している。

階層パターン



a-a 断面図 S=1/300

ゾーニングと動線計画



a-a 断面図 S=1/300

面積表	
敷地面積	1263.38㎡
建築面積	720㎡
建築率	57% (容積 54%)
延床面積	3781㎡
容積率	299% (容積 300%)
建ぺい率	22%
面積	
1階	496㎡
2階	524㎡
3階	442㎡
4階	434㎡
5階	412㎡
6階	467㎡
地下階	1,006㎡
計	989㎡
展示室面積	
2階	363㎡
3階	250㎡
4階	278㎡
5階	98㎡
計	989㎡
屋上緑化面積	
地上緑化面積	74㎡
屋上緑化面積	146㎡

